

## 【目的】

今日、スポーツ界の注目のされ方が変わってきた。試合の動向だけでなく、スポーツ選手や監督の個人の考え方への注目が高まってきており、関連書籍の出版も目に付く。監督のリーダーシップへの注目もその中の1つとして挙げられる。監督の考え方を書いた本が、ビジネス書として紹介されることも少なくない。しかし、スポーツとビジネスは違う部分が多くある。では、ビジネスの世界を想定して考えられてきた既存のリーダーシップ理論に、スポーツの世界の監督のリーダーシップは当てはめることが出来るのだろうか。本卒業論文では、その部分を明らかにしていくことを目的としている。

## 【先行研究】

この卒業論文ではリーダーシップの定義を「個人の人間性や言動によって、フォロワーを目標達成のために効果的な自発的行動へと導いていくプロセス」とした。これまでにリーダーシップについて様々な理論が提唱されてきたが、主に5つの分類に分けることが出来る。

1. リーダーシップ特性論
2. リーダーシップ行動論
3. リーダーシップ状況適応論
4. 変革型リーダーシップ論
5. リーダーシップ開発論

この卒業論文では、特に4. 変革型リーダーシップ論に焦点を当て、調査を行っていくこととする。

## 【方法】

調査対象としてはスポーツ総合雑誌『Sports Graphic Number』の過去10年間分を選んだ。調査は第1調査と第2調査に分けて行った。まず第1調査として、過去10年間の雑誌に載っている監督に関する記事の数を様々な種類別に調査した。次に第2調査として過去10年間で最も記事数が多く、かつ成績を残している3人の監督の記事内容を分析した。変革型リーダーシップの特徴を①ビジョン項目②戦略項目③絆項目④理想項目の4つに分け、それぞれに当てはまる文章の数と内容を調査した。今回はサッカーの岡田武史監督、ジョゼ・モウリーニョ監督、そして野球の王監督の記事を分析した。

## 【結果】

第1調査の結果として、団体スポーツの監督と個人スポーツ

の監督（コーチ）では、団体スポーツの監督が取り上げられる数が圧倒的に多いことが分かった。また、年別に見てみると、監督に関する記事は近年になるにつれて増えていることが分かった。特にここ数年での伸びは大きく、監督が注目されるようになったのはごく最近であるということが分かる。

第2調査の結果として、モウリーニョ監督の記事中には変革型リーダーシップの特徴を表す言葉が非常に多く見られた。それに比べて、岡田武史監督と王貞治監督の記事中には変革型リーダーシップの特徴を表す言葉は少なかった。内容を見ると、③絆項目に関する文章はそれぞれ多かった。また、④理想項目に関する文章はそれぞれに少なかった。

## 【考察】

第1調査の結果から、監督について注目されるようになったのは最近のことであり、今後はますます注目されていく存在であることが分かる。

また、第2調査の結果を見ると、監督の記事内容は思った以上に変革型リーダーシップの理論に当てはまらなかった。しかし決して、彼らがリーダーシップの要素を持ち合わせているのではなく、監督の人間性に関わる部分などのリーダーシップの要素が誌面に出てくることが少ないだけではないか、という印象を受けた。ジョゼ・モウリーニョ監督と岡田武史監督・王貞治監督の間に差が出たのは、日本の国民性とマスコミの性格が関係していると考えられる。日本ではマスコミに対して強く自分の意見を主張する人間は少ない。それが今回の結果の違いに繋がったのではないだろうか。

③絆項目については3人が共通して十分に満たしていると考えられる。企業と違い、試合に勝つために監督（リーダー）の出来ることは意外に少ない。戦略や指示を考えても、結局は選手次第となる。だからこそ、監督としての力を十分に発揮するためには、選手との信頼関係は必要不可欠なだろう。

決して、リーダーシップの要素を持ち合わせていないのではなく、監督の人間性に関わる部分などのリーダーシップの要素が誌面に出てくるのが少ないだけではないだろうか

しかし、この調査に関しては限界も多くあった。「スポーツ界の監督のリーダーシップはビジネス界を対象とした既存のリーダーシップ論に当てはまるのか」という問題に対して明確な答えを出すためには、更なる研究が必要である。